

関東の争乱と小弓公方足利義明

はじめに

関東の争乱は、享徳 3 年（1454）勃発の享徳の乱に始まり小田原開城まで 136 年間に亘る。この間離合集散を繰り返す混迷の歴史を理解するのはなかなか難しい。そこでこの争乱の経緯を改めて辿ってみると、天文 7 年（1538）の「第一次国府台合戦」が変節点であったことが分かり、この視点で歴史の流れを復習してみたい。

この争乱は関東足利氏を中心に展開されていくのであるが、関東足利氏と言う貴種が権威と求心力を持ち続けた時代が、第一次国府台合戦の小弓公方足利義明の滅亡によりその衰退が明らかとなって、室町的価値観から戦国の価値観の時代へと変わっていった。そして公方の権威は覇権の正当化のための名分として担がれ利用される時代を経て、終にその存在意義も消滅して行く。しかし、血は尊重され貴種としてその後も尊奉される存在として残されたのである。

ここでは、小弓公方成立の時代背景と足利義明の野望と挫折を通して時代を考え、併せて関東足利氏の帰趨を辿ってみた。

1. 歴史的背景—関東争乱の系譜—

(1) 永享の乱（1438 年）と結城合戦（1440 年～1441 年）

鎌倉公方第 4 代足利持氏は、応永 23 年（1416）の上杉禅秀の乱を幕府の支援によって収めて権力を掌握すると、その後小栗満重、宇都宮持綱等京都御扶持衆等の反持氏勢力の粛清に走りまた将軍の座を画策したりして将軍義持と対立する。一時収まるかに見えたこの確執は義持の没後将軍義教の就任により一層持氏の自立の動きが強まり反幕府的态度が顕著となる。これを諫める管領山内上杉憲実との関係が険悪となって永享 10 年（1438）憲実が危険を感じて領国上野へ退去すると持氏は憲実追討のため出陣する。異変を知った幕府は持氏追討令を発し今川範忠が鎌倉へ進軍、三浦時高他関東武士もこれに応じて持氏および嫡子義久は敗れ翌年 2 月鎌倉で自害する。これが永享の乱である。

その翌 12 年、持氏の遺児安王丸・春王丸が結城氏朝等反上杉の諸将に担がれ挙兵、結城城に立て籠り幕府軍の上杉清方、今川範忠等と戦うが約 1 年後兵糧が尽きて落城、安王丸・春王丸（享年 11・13 歳）は美濃垂井で斬られる。しかし、その弟達は奇しくも嘉吉の変で将軍義教が赤松満祐に謀殺されたことで命を保つことが出来た。（関東足利氏系図参照）

(2) 鎌倉府復活（1447 年）

永享の乱の後の鎌倉府は管領上杉氏により支配されていたが、関東の諸侍（小山、宇都宮、千葉等伝統的豪族層他領主層・御家人）はもともと鎌倉公方を重んじていたこと、一方上杉氏とは支配関係は無く所領問題等で対立が激化していった。上杉氏も、公方一管領体制復活により公方権力を介して

関東諸侍を抑えることを考え文安4年(1447)信濃大井持光の下に逃れていた持氏の遺子万寿王丸(成氏)を迎え入れ鎌倉公方体制が復活する。両陣営共貴種を戴くことが重要であったのである。この時、成氏17歳、管領山内上杉憲忠15歳、扇谷上杉顕房15歳で両上杉氏は家宰の長尾景仲、太田道真が実権を握っていた。

(3) 享徳の大乱(1454年～1482年)

(江の島合戦)

公方復活の直後から関東諸豪族層を擁して鎌倉府体制を永享の乱以前への回帰を目指す成氏と一方永享の乱以後の支配力の浸透によって得た権益の確保を図る長尾、太田等上杉陣営との間に対立が生ずるのは自明であった。端的に言えば両陣営による領地の押領抗争である。

宝徳2年(1450)、長尾景仲・太田道真(道灌の父)等が成氏を襲う江の島合戦が勃発、成氏与党の小山・宇都宮・小田氏等が反撃してこれを糟屋(扇谷上杉本拠)に追い退ける。幕府の調停で成氏は鎌倉に戻るが成氏の主願であった権力を伸ばしていた長尾・太田両氏の排除もならず所領横領問題は何ら解決せず、むしろ対立が公然化していった。

(享徳の大乱勃発)

享徳3年(1454)12月、成氏は結城成朝、里見義実、武田信長等をして管領上杉憲忠を鎌倉で謀殺し、更に上杉・長尾・太田を誅伐するべく出陣する。成氏軍は、相模糟屋近郊の島河原の合戦(対扇谷上杉持朝、太田道真)、武蔵高幡・分倍河原の合戦(対長尾景仲・犬懸上杉憲顕・扇谷上杉顕房)他緒戦で勝利を挙げ優勢に軍を進める。以後28年に亘る享徳の大乱の勃発である。(成氏は以後都鄙和睦まで「享徳」の年号を使い続けている。)

これに対し幕府は憲忠の弟房顕を関東管領として越後上杉軍を糾合して成氏討伐に向かわせると共に今川範忠軍は鎌倉に入る。このため成氏は小栗城に立て籠った長尾景仲以下常陸上杉勢を陥落させた後、要衝の地「古河」に本拠を定め小山、結城、佐竹、那須、小田、宇都宮、千葉、岩松氏等反上杉の伝統的豪族・領主層を糾合し、古河城の周囲に關宿(篠田氏)、騎西(佐々木氏)、栗橋(野田氏)等の城を築いてこれに対抗する。古河公方の成立である。幕府・上杉軍は五十子(本庄市)に本陣を設営しまた太田資清(道真)、資長(道灌)父子等の活躍により松山、河越、江戸、岩付などの諸城を構えこれに対峙することになる。

(宇都宮等綱は当初上杉方、子明綱により公方方へ、千葉氏は傍流馬加氏が上杉方の嫡流を追い公方方本佐倉城千葉氏となる、また岩松氏は公方方から後上杉方となる等一様ではない。)(享徳の乱勢力図参照)

(堀越公方下向)

幕府は成氏の公方を否定し、長禄2年(1458)将軍義政の弟政知を鎌倉公方に任命下向させる。これが鎌倉に入ることが出来ず伊豆韮山に御座する堀越公方である。ここに形として堀越公方一管領山内上杉体制となる。その翌年両軍総力による羽継原(館林市)の戦いがあり古河公方側の勝利で終わるが上杉方は幕府へ勝利したと告げ多くの感状を受領するという一幕もあった。

その後両陣営による合戦は、文明3年(1471)に古河方が堀越公方を三島に攻める一方反撃を受け成氏が古河を攻められ千葉氏(本佐倉城)を頼り脱出する(翌年与党を糾合し反攻帰城する。)等もあったが、一進一退を繰り返し長期化する。

その間、上杉方では長尾景仲が没し景信に、管領房顕が陣没し越後上杉氏からの顕定がそして扇谷上杉持朝を継いだ政真が五十子陣にて討死し定正がそれぞれ継嗣となっている。

(4) 長尾景春の乱 (1476年～1480年)

この鼎立状態に攪乱を起こしたのが文明8年(1476)勃発の長尾景春の乱である。前年長尾景信が没した後顕定は、その嫡子の景春に世襲を認めずその伯父の忠景を家宰としたことが契機であった。景春は翌年正月五十子陣を襲いこれを崩壊させ顕定、扇谷上杉定正を上野に追う。これに自立化過程にあった豊島氏(石神井・練馬城)等景春党が呼応して武蔵、相模各地に飛び火して行く。この乱を鎮定したのが扇谷上杉氏の家宰であった太田道灌である。道灌は当初和解に努めたが景春が応じず征討と決し、配下と共に各地を転戦撃破し文明10年景春の本拠鉢形城を、文明12年(1480)最後の拠点武蔵日野城を攻落、敗れた景春は支援を受けていた古河(成氏)に逃亡する。

(5) 古河公方・上杉氏の和睦 (1477年) と都鄙合体 (1482年)

長尾景春の乱で五十子の陣が崩壊し更に成氏が景春を支援するに至った体制の危機に直面した上杉顕定は、文明9年12月上野相馬が原の対陣の際に都鄙和睦の仲介を条件として成氏との和睦を申し入れる。享徳の乱は、元々成氏と上杉氏の対立であり、このころ既に当事者の第一世代が世を去っていて、この両者の対立は意味が薄れてきていたこと、成氏は幕府との和解を望んでいたので和睦が成立する。都鄙の和睦の交渉は難航するが、越後上杉房定の斡旋で文明14年(1482)都鄙合体が成立する。幕府側としては、堀越公方政知に伊豆一国と御料所を渡すことでかろうじて面目を保った形で収束した。

都鄙の和睦で関東の争乱が終息することにはならない。享徳の乱の原因であった伝統的豪族層と新興勢力となっていた長尾氏、太田氏を主宰として抱える両上杉氏との抗争およびそれらの内部間の軋轢が解決した訳ではなかった。

(6) 太田道灌謀殺 (1486年) と長享の乱 (1488年～1505年)

享徳の乱、長尾景春の乱を通して太田道灌は、両上杉氏にとってもその功績は大であったが、主君扇谷上杉定正及び顕定の処遇は冷淡であった。道灌は日野城に景春を追った文明12年、自身・朋輩の功績と顕定・忠景への不満を長文の書簡にして高瀬民部少輔(顕定家臣)に託している。これが「太田道灌状」である。

しかし文明18年7月道灌は定正に相模糟屋の館にて謀殺される。この理由については、道灌を擁する扇谷上杉氏の台頭に警戒感を持った顕定の讒言と道灌の勢力・声望の高まりに対する定正の下剋上への恐れ、更に背景に定正家臣団の内部抗争があったと言われている。道灌の嫡男資康は顕定へ走り、道灌亡き後扇谷上杉氏が弱体化したと見た顕定は、翌長享2年(1488)実家越後上杉の支援の下に攻勢に出る。これに対し定正は、古河公方成氏と結んで対抗した。両上杉氏間の抗争、長享の乱である。両者は武相各地で対戦するが、明応3年(1494)武蔵高見原の戦いの時定正が陣没すると政氏(成氏は明応6年没)は一転顕定を援助して定正の継嗣朝良と対抗することになる。以後顕定と政氏は緊密な関係を持つ。顕定は、政氏の弟顕実を養嗣子に迎え「御一家」となり室町の秩序、公方―管領体制の権威の復活を図ったのである。

これに対し定正を継いだ扇谷上杉朝良は、明応2年（1493）に堀越公方政知の継嗣茶々丸を追った新興の伊勢新九郎（宗瑞）及び今川氏親と結ぶ。これは宗瑞の伊豆侵攻が茶々丸を支援する伊豆守護であった山内上杉氏との抗争でもあったからである。朝良はこの連合により永正元年（1504）武蔵立河原（立川市）の合戦で山内上杉方に勝利を収めるが、翌年越後上杉の支援を得た顕定に河越城を攻められて降伏し和睦が成立、18年間の長享の乱が終息する。

こうして顕定は一族の争乱を収め古河公方との良好な関係を築くことに成功して、享徳の乱勃発以来51年振りに関東は、本来の公方一管領体制に戻り一時の静謐を迎えたのである。

2. 足利義明の登場・・・その野望と挫折

（1）永正の乱 ―古河公方家の内紛（1506年～1518年）―

両上杉の抗争が決着して間もなく永正3年（1506）に古河公方政氏とその嫡子高基との間で権力闘争が生じる。政氏が山内上杉顕定と連携して関東支配を再建しようとしたのに対して高基は妻の実家宇都宮氏との連携を重視したことが原因と言われている。この確執は一旦顕定のとりなしで和解するが、顕定が長尾為景に討たれた実弟の上杉房能の仇を打つべく越後に出兵し討死する（永正7年）と再燃する。顕定の2人の養子、足利成氏の二男（政氏弟）顕実と上杉一族（憲忠の弟の子）の憲房の間の家督争いからみ政氏は顕実、高基は憲房とそれぞれ組んで争うことになる。この争いは山内上杉一族を擁する憲房が優位となり永正9年政氏は古河城を退き高基が古河城に入って古河公方の地位を確定する。そして12年顕実が没することで憲房が関東管領になり決着する。政氏は翌13年扇谷上杉朝良を頼って岩付城へ移り、同15年朝良の死（継嗣朝興）により後ろ盾を無くし久喜甘棠院かんどうに隠棲し政治生命を終える。高基は、管領憲房に実子憲寛を養子に送り込み新たな公方一管領体制を敷く事になる。

（足利義明、挙兵）

この混乱の最中永正7年（1510）、後の足利義明が登場、武蔵太田庄で挙兵し小山城に入り「南の上様」と呼ばれ、古河＝政氏、高基＝関宿と3者鼎立状態を作りだすことになる。義明は、当初政氏に反抗して高基に与していたが、政氏が小山城から岩付城へ退くころからは政氏と結びその正当な後継者としての立場を主張することになり、狭ここに20年余に及ぶ古河公方と小弓公方の抗争が始まるのである。

（2）足利義明の生立ちと小弓公方の成立（1518年～1521年）

義明は長享の乱の始まったころ足利政氏の二男として生まれる。幼名は愛松王丸と言い明応2年（1493）に成氏弟の雪下殿せんじょう尊傲を継承して鶴岡八幡宮若宮別当（雪下殿・社家様）となり文亀3年（1503）ごろ得度して空然こうねんと改める。15、6歳ごろであった。その座所は古河公方成立以来の下総国下河辺庄高柳（現栗橋町）であったと言われる。

なお、義明の兄弟には、兄高基の他弟基頼、貞岩（久喜甘棠院主）、妹（渭継尼・松岡殿／東慶寺住職）がいる。（雪下殿は鶴岡八幡宮若宮別当のみならず鎌倉府の御料所内の諸社寺に対する宗教的支配権を握り、鎌倉公方の政治的支配権と併せて政教（聖俗）両支配の一翼を握っていた。公方一社家体制と言う。これと公方一管領体制の2つが調和して機能する体制が室町期の関東の政治的秩序で

あった。)

空然は挙兵のころ一時宗齋と名乗るが永正9年高基が政氏を小山城に追って古河城に入り事実上古河公方となったころ還俗して源氏嫡流を意識して「義」を用い「義明」と名乗り、「聖」から脱皮して政氏の正当な後継者として政治意志を明確にした。つまり、高基の意図する公方一社家体制を拒否、対立姿勢を明確にしたのである。そして永正14年(1517)に上総真里谷武田信清(怨鑑)が伊勢宗瑞(早雲)の支援を得て長く争っていた高基方の小弓城原氏、真名城三上佐々木氏を破ったその翌年(1518)に怨鑑の招請を受ける形で上総に入部(市原庄八幡郷)、次いで大永元年(1521年)までに小弓城(千葉市中央区)に移り、「道哲」と号している。ここに小弓公方が成立する。

(氏綱が進めた鶴岡八幡宮の造営の状況を記した同宮供僧快元の「快元僧都記」他古書に、父政氏から勘当され奥州にいた義明を怨鑑が招聘してそれにより原氏を討つことが出来て小弓城に入ったとあり通説であったが、近年の研究により上記の経緯が妥当と思われる。)

(3) 小弓公方と古河公方の対立

(両陣営の勢力と義明の野望)

武田怨鑑の意図はそのころ上総・下総は、政氏、高基、関東管領山内上杉、扇谷上杉、新興勢力伊勢宗端らの動向と絡んで離合集散を繰り返す中であって貴種足利義明を取り込むことにより勢力の結集と拡大を図ったところにあった。

しかし、義明は単に旗印として掲げられて満足する器ではなかった。雪下殿時代以来の家臣逸見氏、佐野氏等直臣団の奉行人組織を作り、房総にて長く足利氏の御料所経営に携わってきた被官の諸氏、自立に際して古河足利氏から随行してきた者、加えて常陸から家臣を伴い合流(大永3年(1523))してきた弟基頼などを吸収して権力基盤を作り、更に安房里見氏、上総真里谷武田氏、下総白井氏、上総土気酒井氏、遅れて常陸小田氏、多賀谷氏などの領主層を傘下に組み込み古河公方と対抗する勢力基盤を急速に作りあげている。義明の究極の目標(野望)は古河公方を倒し関東足利家の惣領となり鎌倉公方として関東の長者となるころにあったのである。なお、武蔵の扇谷上杉朝興は政氏との結びつきを継承して義明と連携の関係にあった。

この時点では、貴種がまだ勢力を糾合する土壌があり、その権威を失っていなかったのである。

一方高基側の勢力は、古河城、関宿城(築田氏)を中心に下総は千葉氏(本佐倉城)、東金城酒井氏、結城氏、小金城高城氏等、常陸は菅谷氏、羽生氏の他江戸崎城土岐原氏等の領主達であった。関東管領山内上杉憲房は、上記のとおり高基と密接な関係にあった。(小弓公方成立時勢力図参照)

(両公方の抗争)

義明の上総入部後の急速な展開に危機感を持った高基は、永正16年自ら出陣して真里谷武田氏の椎津城(小弓城の南西にあり江戸湾水運の要衝。現姉ヶ崎)を攻める。一方義明はこれに対抗して里見義通に上総・下総の高基派(千葉氏、原氏、長南武田氏)を、また古河城の膝元の河川水運の要衝築田氏の関宿城を攻めさせている。このころ太日川(江戸川)、古利根川、常陸川、香取内海(印旛沼)、霞ヶ浦などの水系が江戸湾沿岸と関宿、古河、佐倉等の津々を結び物流・水運が発達していたものと考えられ、この両者の攻防では江戸湾制海権、河川水運権を巡る抗争の視点は欠かせない。義明から見るとこれを制すれば古河城への道が開けるのである。戦略目標の関宿城を目指して、印旛沼畔和良比、白井城から相馬郡内に至る内陸ルートと太日川を北上するルート上の小金(松戸市)、名都借(流山市)など西上総で度々合戦が行われたがこれも印旛沼、手賀沼、常陸川(現利根川)と古利根

川水系の太日川流域の水運権支配の争いも焦点であった。

小弓公方の出現は、房総のみの問題ではなく広く関東の動揺となる。常陸では椎津攻撃の際では高基方であった小田氏が古河方の土岐原氏（江戸崎）との紛争から連携する多賀谷（下妻）、麻生（行方）と共に小弓方になり、宇都宮氏、小山氏に於いても小弓公方と結びつく勢力も現れ古河方の動揺も見られたのである。この間古河公方家では、またまた高基・憲寛対晴氏・憲政の権力闘争があり高基が敗れて天文4年失意の中に没し、晴氏が公方となっている。

（４）後北条氏の武蔵進出と後北条包囲網

この時点での後北条氏の動きを見ると、伊勢宗瑞（早雲）は、永正13年（1516）新井城に三浦義同、義意父子を滅ぼして相模を制圧し、武蔵及び房総に進出を始める。そして、宗瑞（永正16年没）のあとを継いだ氏綱は、支配の正当性の名分を示すため北条に改称、大永4年（1524）には扇谷上杉領の江戸城を太田資高（資康子）の内応を得て奪取する。さらに翌年岩付城、蕨城、毛呂城（入間郡毛呂町）等を攻略するに至って扇谷朝興は河越城からも撤退させられる。しかし朝興は、直ぐに山内上杉憲房、甲斐の武田信虎の援軍を得て岩付城、毛呂城を奪回、その後も両者一進一退の攻防が続いている。

この後北条氏の武蔵侵攻は、山内、扇谷両上杉氏のみならず江戸湾及び関連河川の支配にも係ることと房総諸勢力にとり大きな脅威となってきたのである。大永5年真理谷武田恕鑑は、両上杉氏からの要請を入れて氏綱との手切れを表明し、義明はもとより里見義豊（義通の子）と共に北条氏に対抗する事になる。こうして南関東では、両上杉氏、甲斐武田氏、小弓公方、真里谷武田氏、里見氏等が連携して後北条包囲網が形成されたのである。

大永6年真里谷武田氏と里見氏の正木水軍が扇谷上杉の蕨城奪回に呼応して海上から隅田川を上って浅草寺方面、品川津を攻撃しており、また里見実堯（義豊の伯父）が朝興の玉縄城への進撃に呼応して鎌倉に侵攻し鶴岡八幡宮ほか寺社を破壊、神宝を奪うという事態が発生、これを氏綱が撃退する等の動きに発展している。（大船駅近くにその供養碑がある。）

これに対し北条氏綱は、上総の反小弓公方勢や古河公方高基に接近を図るが、この包囲網により情勢は氏綱にとって暫く優位には運ばなかった。氏綱はこの間破壊された鎌倉鶴岡八幡宮の造営に着手（天文元年）、関東諸侍に勧進を求めている。

後北条氏が関東制覇へ動き出すのは、その約10年後の天文6年（1537）河越城攻略を待つことになる。その転換の契機となったのは、里見氏及び真里谷武田氏の内紛であり、氏綱はこれらに介入して切り崩しにかかったのである。

（５）里見氏、真里谷武田氏の内紛と情勢の変化

（里見氏の内紛）

里見氏は、新田義重の子義俊が祖で上野国碓氷郡里見郷を出自とし、下って結城合戦で敗戦・自害した家基の子義実が遁れて三浦から安房に渡ってかなまり神余、丸、安西、東条の諸安房豪族を平定して文安年間（1443～1448）に安房里見氏の祖となったもので、当代義豊は第4代であった。

天文2年（1533）里見義豊は、幼年のころから後見を受けていた伯父里見実堯及びその重臣正木時綱（通綱とも）を居城（稲村城）に呼び出して謀殺する。理由は里見軍の実力者である実堯による

家督篡奪を恐れかつ実権の掌握のため先手を打ったと言われている。実堯の子義堯は、時綱の子、時茂・時忠と共に北条氏綱に援軍を求めこれに対抗、妙本寺（保田）の合戦で義豊を敗走させる。義豊は遁れて真里谷武田恕鑑の支援を受けて翌年反撃に出るが、平久里、稲村城で再び敗れ義豊は敗死、義堯は安房の実権を掌握しその後上総へ勢力を拡大して行く。

（真里谷武田氏の内紛）

真里谷武田氏は、甲斐国守護武田信重の弟信長が古河公方成立の年、馬加康胤が同族主家上杉方の千葉胤直・胤信を滅ぼし胤直の子実胤・自胤を武蔵に追い落す時成氏方の有力武将として同陣し上総へ侵攻して、庁南城、真里谷城を取り込み上総に勢力を築いたもので、第5代信清（恕鑑）は真里谷武田氏を継ぎ庁南武田氏を凌ぐ勢力を築いていた。

天文3年里見氏の内紛が終息して間もない7月恕鑑が没するが、この前後から嫡子^{のぶまさ}信応と庶子信隆との家督争いによる真里谷武田氏の内紛が始まる。

小弓公方義明は、信応に家督を継がせ真里谷武田氏を小弓公方勢力として掌握するべくこれに介入、出陣して信隆を打ち退けることに成功する。これに対し、信隆は、天文6年後北条氏の援軍を得て反攻にでるが、義明は、里見義堯を調略して北条氏と手を切らせ公方方に取り込むことに成功、これにより義明・信応側が優勢になり信隆及び後北条氏援軍の金石齋（大藤信基）が窮地に置かれることとなった。氏綱は、やむなく鎌倉東慶寺（当時住職は義明妹渭継尼）を通じてその仲介により金石齋の救出を図り、また里見義堯の斡旋により和議が成立、信隆は武州金澤に移り事態が収束した。

（情勢の変化と後北条氏の攻勢）

これらの里見氏、真里谷武田氏の内紛により、小弓公方義明のかつてその支持基盤であった里見氏では親小弓公方の義豊に替わって義堯は勢力伸長による自立化を強め、一方真里谷武田氏は内紛がくすぶり弱体化してきていた。

これに並行して小弓公方周辺には、種々情勢の変化が生じていた。

天文4年に古河公方高基が51歳で没し、子晴氏が古河公方を継承し義明と対峙することになる。また、同6年4月扇谷上杉朝興が50歳で没し子朝定13歳が後を継いでいる。朝興の死による扇谷上杉の勢力の後退に乗じて氏綱は、河越城を同年7月15日に攻略し、朝定を松山城に追い、翌天文7年2月には扇谷上杉氏の家臣大石氏が守備する葛西城（葛飾区青戸）を攻略してさらに太田資正の岩付城下を焼き討ちして武蔵支配を固めていく。

（6）第一次国府台合戦と義明討死

（義明、国府台城への出陣）

天文7年、このような情勢変化に対し小弓公方義明は、北進し関宿城攻撃の軍事行動に踏み切る。義明の戦略目標は古河城攻略にあったので古河公方と接近している後北条氏の葛西進出は、その進路となる江戸湾から太日川へ入って名都借、関宿、古河に至る水運の支配に対する危機であった。また、後北条氏の葛西城奪取は、扇谷上杉氏との連携の妨げであると共に後北条氏の西下総侵攻の危惧も生じる事態であり緊張が一気に高まったのである。

義明が房総の小弓方勢力に参陣を要請し国府台城（市川市）に入ったのは、同年9月末であった。

国府台城は、文明 10 年（1478）古河公方と管領上杉氏の和睦に反対する千葉氏を討つため太田道灌が前線基地として築城したもので太日川水運の拠点であり江戸城、葛西城と対峙する要衝であったと同時に関宿、古河への北進の為の戦略的要地であった。

（氏綱、晴氏の御内書により出陣）

この動きに対して古河公方晴氏は、北条氏綱に助勢を求め「小弓公方追討のご内書」を下す。この戦いの本旨は関東足利公方の貴種性＝正当性を巡る戦いであったが、氏綱は、「上意による小弓公方御退治」との名分のお墨付きを得ての下総侵攻の機会と捉え 10 月 2 日子息氏康を伴って小田原城を進発、10 月 5 日江戸城、6 日には太日川を挟み国府台城の北「松戸の台」の対岸に着陣している。つまり、この戦いは、関東足利家の正嫡を巡る対立を主軸に後北条氏と房総領主の領国争いの二面性を持っていたのである。

（双方の戦力）

小弓方、後北条方両軍勢の規模は実ははっきりしない。小弓方「両総房士卒具足 1000 余衆」、北条方「武相豆軍兵引率 5000 余騎」、また「小弓さま御せい（勢）は二千よき（余騎）」「左京の大夫氏つな（綱）は三千よき（余騎）にてひかえたり」（鶴岡八幡宮快元僧都記、国府台戦記他）と諸説ある。（諸書に小弓方討死数百人から千人とあり、後北条軍勝利後の首実検にて首の数は 1000 余と書かれた書もあり、上記小弓方軍勢（1000～2000）の数と整合性も疑わしい。里見勢の兵数の記録も無くいずれにしろこの合戦の双方の兵数については確証がないようである。）

小弓公方側の陣容は、義明・義純父子、弟基頼を大将に逸見山城入道祥仙他の奉行人衆の直臣団を核に里見氏（義堯）、真里谷武田氏（信応）、上総土気城の酒井氏（定治）などであった。しかし、その内部事情を見ると、義明がその主力と頼んでいた里見氏は、前年に北条との連携を断って復属したが義明とは知行に基づく主従関係は無く、むしろ自立化を志向していたのでこの合戦には消極的であり、酒井氏は里見氏に追従、また、真里谷武田氏は、内紛で弱体化した状態であった。

（義明討死）

戦いは、北条勢が 6 日夜半に国府台城のつづきの上流「松戸の台」に渡河、先鋒勢を上げ翌 7 日から合戦が始まった。戦闘は現在の相模台（松戸市）から矢切にかけて行われたが、北条側が有利に運び、これを見て国府台城から反撃に出た基頼、義純が討死したとの報に義明は激怒、自身出馬して乱戦の中で「関八州無双の強弓・横井神助（三浦城代）ト云者カ射ル矢ニアタリタリテ死ス」（鎌倉九代後記）と討死する。義明は、何人も切り伏せた後射られたと言われ豪勇であったらしい。一方里見軍は、緒戦の戦況不利を見て殆ど戦闘に参加せず戦線離脱して素早く安房へ戻ったと言う。真里谷武田氏、酒井氏も同様であったと云われている。

小弓軍の敗戦は、戦記的には諸将の進言を無視してみすみす渡河を許し、また個人の勇猛さを求めた義明の戦略的無能が招いたとされているが、歴史的に見れば、小弓公方の成立当時の勢いがある後の真里谷武田氏の弱体化、里見氏の自立化等に見られた時代の変貌によってその威光による求心力・統制力が既に低下していたことにある。与党であった常陸勢も一切参陣しておらず一部の房総勢力の寄せ集めにすぎなかった、しかもそれらには積極的戦闘意欲が見られなかったところにあり、結局義明以下直臣団による個人的戦闘にならざるを得ず大将自ら討死することになったのであった。これにより、関東足利氏の正嫡争いが結着、そしてこれが最後の内訌となるが、それは以降関東公方の権威が既に形骸化したことをも意味している。

3. 第一次国府台合戦後の関東

(1) 後北条氏の公儀性の確立

国府台での勝利後氏綱は、下総から上総に侵攻、原氏を小弓城へ戻し、武田信隆を復権させるなど下総、上総を収めて鎌倉経由小田原に帰城する。この結果、後北条氏の勢力は、江戸、葛西、岩付、河越の武蔵のほぼ全域に加え下総・上総の過半に拡大している。

氏綱は、この義明を滅亡させた勲功により古河公方晴氏から関東管領職に補任される。(この時氏綱がその御内書を頂戴したと後に氏康が遺している。)

また、翌年天文8年には、氏綱娘(芳春院)と晴氏の結婚が実現する。(後北条との連携を考え高基が約していたが、これに反発し築田氏と近い関係にあった晴氏との不和のために伸び伸びになっていた。)

これによってこれまで「他所者」とされていた後北条氏は、関東足利家の「御一家」と関東管領の2つの権威を手中に収め、形骸化したとは言え関東の正当な政治的支配である公方一管領体制に組み込まれて公儀性を主張する名分を得たのである。併せて天文9年9月鶴岡八幡宮造営を完成し遷宮式を行い関東武家のリーダーであることを誇示している。

この合戦により関東の地図は、伝統的勢力による貴種足利公方を巡る室町的体制を軸とする抗争から後北条氏の覇権への道、戦国的抗争に塗り替えられた。

この意味で小弓公方足利義明滅亡の第一次国府台合戦は、関東争乱の重要な変節点であった。言い換えれば、中世的・室町的争乱から近世的・戦国的争乱へ移行したと言えよう。

(2) 河越夜戦と公方一上杉管領体制の崩壊

(河越夜戦)

後北条氏の勢力伸長と関東管領権行使に対し危機感を持つ管領山内上杉憲政は、天文10年(1541)氏綱が死去し氏康(27歳)への交代の前後ごろから反後北条包囲網再構築に力を入れる。後北条氏に対する安房里見氏の反攻、駿河の今川義元の河東一乱(後北条氏からの失地回復戦)、武田晴信(信玄)のこれへの参戦等で機が熟したと見た憲政は、天文14年晴氏を説得して抱き込み反後北条勢力を結集して河越城を包囲する。

包囲の大軍(8万騎とも)に対し守城軍は北条綱成以下3,000と言われている。これに対し氏康は、今川と屈辱的譲歩により和睦して8,000騎を率いて河越救援に向かう。氏康は、和睦を申し入れる等戦意を隠し虚を突いて夜襲を敢行、これに成功して憲政は上野平井城に、晴氏は古河へ敗走、扇谷上杉氏は朝定が討死して滅亡、と後北条氏の完勝に終わる。

この勝利により武蔵の諸将は続々と後北条氏に帰属、晴氏は氏康の圧力下に置かれここに最終的に古河公方一上杉管領体制が解体して、後北条氏が名実共に関東管領の威を奮うこととなった。

(上杉憲政、越後へ逃亡と氏康による公方支配)

上杉憲政は、その後信濃の村上義清と武田晴信の抗争に巻き込まれ大敗を喫し、弱体化していく中、天文19年から始まる氏康による平井城攻撃の結果、天文21年には上野、下野の諸領主が離反、終に家臣によって平井城を追放され越後の長尾景虎を頼り落ちていくことになる。

憲政の越後逃亡により晴氏は、氏康に屈してその甥梅千代丸(義氏、母芳春院)に家督を譲り隠退

する。しかし晴氏は、天文 23 年（1554）嫡男藤氏と挙兵、反攻を企てるに至って氏康は、古河城を落として晴氏を波多野に幽閉、その後古河に戻るが永禄 3 年（1560）没している。氏康は改めて義氏に古河公方を継承させて水陸交通の要衝の関宿に入れ、この後影響力を強め芳春院を介して傀儡状態に置き公方・管領権限も利用して伝統的勢力の従属化を進めて行くことになる。

（3）その後の関東

（甲駿相三国同盟）

河越合戦と上杉憲政の越後落ちによって後北条氏の次の戦略は、関東での覇権確立にあり、また武田信玄のそれは北信濃攻略であり、今川義元は尾張進出であった。ここに 3 者がそれぞれに専念すべく利害が一致して天文 23 年（1554）に三国同盟が成立する。

（上杉謙信の越山）

一方越後の長尾景虎（謙信）は、將軍義輝から憲政の関東支配を支援するようお墨付きを得て 2 度目の上洛から帰国した翌年永禄 3 年（1560）、後北条氏に久留里城を包囲された里見氏の援軍要請に応じて 9 月越山（関東侵攻）する。ここに以降 14 年に亘る謙信と後北条氏との攻防が始まる。この第 1 回越山では、関東諸将を傘下に糾合して翌 4 年小田原城を包囲、帰路鎌倉鶴岡八幡宮にて憲政より上杉姓と管領職を譲り受け、足利藤氏、憲政、近衛前久を古河城に入れ帰国する。しかし、彼等は翌 5 年北条氏照に追われ藤氏は里見氏を頼り、憲政、前久は救援に駆け付けた謙信と共に越後へ戻っている。

この後も謙信の越山は反後北条の諸将からの要請に応じて毎年のように繰り返され天正 2 年（1574）まで都合 9 回に及ぶが、あたかも岸に打ち寄せる波のように、打ち寄せる時は関東諸将が謙信に靡き、波が引くと後北条氏の反攻でまた寝返ると言った離合集散が繰り返される。

永禄 6 年（1563）12 月の第 4 回越山の時謙信は、武田・北条との決戦と称して里見氏の出陣を要請、里見義弘は太田資正（岩付城）と連携して国府台城に進出する（8,000 余騎）。しかし謙信との連携が遅れるところを北条氏康（2 万余騎）に付かれ急戦となり、翌正月 7 日に前日の大勝に気を弛めた里見義弘軍が虚を突かれ大敗を喫してしまう。これが永禄 7 年の第 2 次国府台合戦である。その 2 年後、上総臼井城で謙信は、後北条方の千葉・原氏に越山後初めての大敗を喫し、これを境に謙信の威信が急落して関東の諸将の多くが後北条方に転向している。謙信の越山は以後も続くがあたかもモグラ叩きのように次第に行き詰まりを見せてくるのであった。

（三国同盟破棄、元亀・天正の戦国へ）

永禄 10 年、信玄は子義信を自刃させ三国同盟を破棄、翌年駿河侵攻を開始するに及んで関東の争乱の軸は武田・後北条の攻防に移って行き、同 12 年には越相同盟が成立、信玄の小田原城包囲、三増峠の合戦が行われている。

翌年元亀に年号が変わり、同 2 年氏康の死去と共に越相同盟が破綻、甲相同盟が復活して以後元亀・天正の戦国の世となるのである。

おわりに・・・その後の関東足利家

（藤氏、義氏の動向）

この間、古河公方家の藤氏、義氏は、後北条氏と謙信の攻防の波に漂い、古河への帰座、退去を繰

り返し、永禄6年再び謙信により上総から戻されていた藤氏は、謙信帰国後すぐ氏康に古河城を落とされ豆州に幽閉され永禄9年没する。義氏は第2次国府台合戦の後退去先の後北条領佐貫から鎌倉へ帰座、そして永禄12年の越相同盟が行われた時、その中で謙信は義氏を正当な古河公方後継者と認めることとなり古河に帰座している。しかし、後北条氏の傀儡として政治的権力は無力化され、関東足利氏の血統を受け継ぐ貴種として存在する事になる。義氏は栗橋城主北条氏照の支配下であって天正10年(1582)に没している。

(小弓公方家)

国府台での義明の敗死により、その近臣は小弓城を焼き義明の遺児、当時3歳の国王丸(後の頼純)及び2女(うち一人が後の里見義弘室青岳尼)を伴い里見氏を頼り安房へ落ちる。

頼純(初名頼^{よりあつ}淳)は、上総小田喜城(大多喜)、安房丸郡石堂寺(南房総市)等に居住、父義明以来の佐野氏、逸見氏等近従が補佐し、子には国朝、頼氏、および島姫(嶋子)等がいた。

嶋子は、18歳ごろ下野国塩谷荘喜連川城主塩谷安房守惟久(清和源氏の末)に嫁ぐが、その2年後(天正18年)惟久が豊臣秀吉の小田原・奥州征伐の際物資・人員の調達命令に応ずるに機を逸したため秀吉の怒りを恐れて出奔してしまう。残された嶋子は秀吉が奥州仕置き(7月17日小田原を出て8月9日会津黒川城から帰洛の途に就く。)の途中古河城に滞陣した折、惟久に二心無き事を弁明すべく古河に出向くが、絶世の美人と言われた嶋子は秀吉の目に止まりその寵愛を受けることになった。この時嶋子は秀吉に上総に居る父頼純、弟国朝をして小弓足利家の再興を懇願、塩谷氏の旧領喜連川の地3,800石を賜ることになる。これにより父と弟は喜連川に移ることが出来、嶋子は上洛して秀吉の側室となった。翌年初め国朝がそのお礼を言上のため上洛する。(通説では、「嶋子が国朝と古河の氏姫との婚姻による関東足利家存立を秀吉に懇望して実現した。」とあるが、ここでは佐藤博信氏の詳細な史料による説を採った。)

(古河公方家)

一方、古河公方家は、義氏没後嫡男が夭折していたため後継者が居らず娘の氏姫(母は氏康娘「浄光院」)がわずか9歳で当主となる。小田原戦後の仕置きにより、秀吉により古河城は没収され、氏姫は鴻巣御所領として332石宛てがわれ鴻巣館に移ることになる。こうして古河足利家が存続する事になり、氏姫はお礼言上のため使者を秀吉の元へ送るのである。

(関東足利家の統一と喜連川氏成立)

期せずして小弓足利氏と古河足利氏が同時期に上洛したことが契機となり、天正19年3月に秀吉から国朝と氏姫の婚姻により足利氏を一体とする命が出るのである。この時国朝20歳、氏姫18歳であった。しかし、国朝は、2年後朝鮮の役参戦のため西国へ下る途中安芸で病死、子が無かったので急遽弟の龍王丸(14歳)が継ぐべく迎えられ、元服して頼氏となり秀吉の命により氏姫を正室とすることになる。なお、氏姫は、国朝との婚姻以来生涯鴻巣館から出て喜連川に移ることはなかった。古河公方家のプライドであろうか。この6年後慶長4年、頼氏と氏姫の間に義親が誕生する。しかし、義親は29歳にして父に先だって没したためその子尊信が頼氏の継嗣となっている。(秀吉は、諸書簡にて国朝を「鎌倉左馬頭」「鎌倉右兵衛殿」と呼び関東公方家の後嗣と認識していたことも含め、秀吉によるこの関東足利氏への配慮、権威付けは、単に名家の廃絶を惜しむのみではなく、徳川家康のこの2年前の源氏姓への改姓による征夷大將軍への志向を牽制する政治的な意図があったのではないかとの説もある。)

喜連川藩は、大阪夏の陣に出陣しその功として 1000 石の加増があり 4800 石となるが、これを 5000 石と称し関東足利氏嫡流として徳川政権下四品 10 万石の格式を与えられる。こうして貴種関東足利氏は名家として幕末に至ったのである。

喜連川氏は、明治 2 年第 12 代繩^{つぐうじ}氏により版籍奉還して足利姓に復している。

*（文中に系図等の添付を参照とありますが、添付書等は省略させていただきました。） 完

参考文献

- 佐藤博信 「古河公方足利氏の研究」 校倉書房 1989 年
佐藤博信 「小弓公方足利氏の成立と展開」 歴史学研究 635 号 1992 年
千野原靖方 「小弓公方足利義明」 崙書房出版 2010 年
千野原靖方 「関東戦国史（全）」 崙書房出版 2006 年
千野原靖方 「国府台合戦を点検する」 崙書房出版 1999 年
則竹雄一・池亨 「動乱の東国史 6、7」 吉川弘文館 2012 年、2013 年
山田邦明 「享徳の乱と太田道灌」 吉川弘文館 2015 年
さくら市ミュージアム編 「喜連川文書の世界」 平成 27 年
他